

ずぶの素人に何が出来る？（私小説風その二）

拙速したか、失敗が起きた。

仕入れ部門であった。仕入れの経験が長いという経歴に安易に信頼を寄せてしまったのだ。新任の責任者が現地へ出向して、業者選びでつまずいた。業者による接待攻勢にあえなく負けて、受け取ってはならぬものを懐にしたようで、私の耳に入って来た。信頼の出来る者を別に向かわせていたところ、その一報が入ったのだ。結局、辞めてもらった。

やはり、業界に疎い素人ゆえの仕事だったのか？順調には行かないことをあらためて認識する。なお、この部門は後になって好適な者が見つかった。

さて、料理を提供する食堂は、フロントとともに大事なサービスの前線である。その責任者選びも苦慮していた。これこそHホテルの常務の専門分野であるが、先の洋食料理長のお願いに引き続きは、さすがに依頼しづらく、躊躇していた、その時、オーナーである知人が好感の持てる青年を連れてきた。

名は石田という。東急系の某ホテルレストランの洋食堂で働いていたところをオーナーが気に入って強引に口説いてきた。

しばらくは準備のための仕事を共にしたり一緒に飲みに誘ったりしたが、清潔感のある四十歳の好青年である。やがて、彼の住まいに伺う機会が何度かあった。クールで綺麗な奥さんが居たが、何かその奥さんに愛想をつかさされた遣り取りの現場に居合わせたしまつて、どうして人の良さそうなこの男がそうなるのか、石田に捨て置けない弟のような親近感を持つきっかけとなった。ともあれ洋食堂・洋宴会場・バーなどの洋食料飲部門はこの石田に決めた。後にこの石田から、接客サービスという仕事に取組む姿勢を背中で

教えられるようになる。

追って、和食堂のサービスは、ほぼ女性中心にしようと、現地採用を進めたところ、実にふさわしい中年女性等がすんなり決まった。そのまよめのマネージャーには、ここで採用した経験豊富で誠実そうな三十代半ば、関東近県出身の男性を充てることにした。

さて、肝心要の全館を取り仕切る支配人をどうしようか。

主要な部門長を固める一方で、さすがに先延ばしにできない焦りとなっていた。

ある日、社長であるオーナーが行きつけの飲み屋で「やなちゃん」とカウンターの隣に並ぶ私に呼びかけてきた。オーナーが昔から私に対して懇ろに喋る時は決まってそう云う。

募集を始めて、思うように支配人が決まらず、頓挫していた辺りから、このままではひょっとして、支配人をやらされる？ 思わぬ展開になってしまっているのではないかと内心恐れていた。自分には、知らない他人をもてなす生業など、およそ向いていない。外向的ではないのだ。だから、自分の内面で葛藤し創り上げる仕事を選び、企画や広告の世界を走ってきたのである。長い付き合いのあるオーナーはそんな私の仕事ぶりを知っているはずだ。

私は、そのころ常務取締役の任にあって、普段オーナーも含めて社内では常務と呼ばれていたが、このオーナーに限って、私に対して何か魂胆があって懇ろに接する際には、「常務」でなく「やなちゃん」と呼びかけてくる。だから、このタイミングで「やなちゃん」に、嫌な予感がした。

そして案の定「総支配人やってくれ」である。「支配人」でなく、「総」が付くのである。フロント支配人はすでに開業していたグルーポのホテルから抜擢し、彼等部門の長を統括する総支配人になればいい、という。面喰った。主要な幹部候補が私の裁量で集まった

のであるから、そのまとめを柳川がつかさどり、職務は経営管理を担当し、サービスマンは現場に任せればよいということである。

何杯かビールやらワインやらあおる内、このど素人に何が出来るというのか？開業後の展開が一体どうなるのか？見当もつかない・・・それら不安はすっかり消し飛んで、いつの間にか私は詰められてしまっていた。そして後日、肚をくくったように、本部の役員会で前を向いて総支配人職を受ける心意気を語ってしまったのだ。

こうして私の人生は、多くの人とのひよんな出会いから発展し方向転換もしながら、時の流れの中で流されるように、自分の本当の意志で無い道をこれまで歩んで来たと、半ば自嘲気味に考えていたが、しかし結局は自分の意志で泳いできたのだと、この時はっきりと自覚し、誰の所為ではない、自分が決めたことなのだ、と言い聞かせて覚悟したことになる。

一方、意外なところから連絡が入った。目下建設中の地元の市長からである。地元で大型倒産があつて、そこから何人かまとめて採用してくれないかというものだった。現地に向いて市長と会った話を伺ってみると、倒産したのは当地で歴史のある造船所で、技術者がいる、役立つと思う、どうだろうか？救ってくれないか。

願っても無いことであつた。ホテル運営に欠かせない施設設備の技術者をちよと探していたところで、即面談し、八人ほど採用することにした。

やがて、この中から電気主任技術者の資格とキャリアのある男を筆頭に、他にボイラー技士や溶接技術を有した者を配下において、ひとつのメンテナンスチームが出来上がった。まとめ役の男は大葉といった。私と同じ年、履歴も面談上も問題ない。以降、付き合うほどに私心のない姿勢を感じるようになって、私は全幅の信頼を寄

せ、施設設備の管理監督を一切託すようになってゆく。

これでようやく主要なメンバーがほぼ揃った。皆キャリアのある期待できそうなスタッフである。ただ一人、ずぶの素人を除いては。

なお学卒募集は、リクルート社によれば、静岡、長野、山梨等の中部地区のリゾート企業で最も多くの大卒予定者が応募したということだった。お蔭で、結構期待できそうな若者を確保することができた。

現地では高校卒の新人も揃った。

こうして整った人的要員は、各部門のマネージャーが教育指導して、現場に立つことになる。

人材募集が一応終えようとしたある日のことだった。

洋食料理長を支える立場に決めていたメンバーが、準備室の仕事が終わったある日、帰る方向が一緒の私に、お茶でも飲みませんか、と誘ってきた。そこで伊勢丹近くの喫茶店に入った。

落ち着いて、あらためて彼を正面にすると、筋肉が隆々とした体格が背広の上からでもよく分る。名は館野という。フランス料理日本選手権優勝者など新進気鋭の仲間がいて、私は彼らと面会もし、館野の能力や人柄を把握したつもりである。なお、その彼らを通じてすでに十名ほどのコックを内定していた。

コーヒーを置いた館野が、思いも寄らぬことを喋りだした。

二、三ヶ月ほど前のこと、新規に集めたマネージャー要員の内、準備室に勤務する四名に不穏な動きがあったという。その内容が「総支配人に決まった柳川は、全くの素人というじゃないか！それでいいのか？呼び出して、確認しよう。大した奴でなければ、着いて行けない、代えてもらおう」（大体そんな主旨であった）

その動きに、自分（館野）が制止して未然に防いだと云う。

有難うと礼を云って、その場は済ませたが、私が雇われた同じ立場で考えれば、おおよそ誰でも、ホテルサービスマンの経験すらない全くの素人が大規模施設の総支配人？大丈夫か？心配するだろう。

しかし、結局私がそれ以上問題として取り上げず、その後も臆面なく指示を出す立場を貫いたこともあってか、開業まで何事もなく経過した。果たして、そうした動きがあったのか真偽は判らない。

いよいよこれで、見切り発車ということになった。

だが、その館野が開業して後に事件を起こすことになった。

（続く）